

高麗前期韓日関係史研究現況

李在範*

1. 序論
2. 高麗前期韓日関係史の研究成果概観
3. 高麗前期対日関係史の研究動向
4. 特徴および展望
5. 結論

1. 序論

韓国における高麗前期の倭寇勃興以前(庚寅倭寇、忠定王2年)の韓日関係史に関する研究は、質的にも量的にもそれほど注目される程ではなかった。高麗時代だけでなく、韓日関係史全般にわたり、研究は韓国よりも日本で非常に活発であるが、特に高麗前期の韓日関係史は他の時代よりもその程度がはなはだしい。そして、研究傾向についても、日本では全般的に扱われているのであるが、それに比べると韓国では1350年以降の倭寇関連の論文が主である。特に倭寇の侵攻とその対応という視角からの研究が多いのである。それに比べ日本では、「麗蒙連合軍の日本征伐」¹を含め、三別抄に至るまで、東アジア、さらには世界史という観点から幅広く認識しようとする傾向にある。すなわち、日本では韓日関係史ではなく、東アジアまたは世界史の一部として韓日(日麗)関係史が研究されていると見受けられる。しかし、最近韓国の学界における韓日関係史研究の傾向にも、かなりの変化があったのは事実である。倭寇討伐の内容で一貫していた雰囲気から、高麗時代の前期にわたる研究が行われるようになり、研究傾向も日本と中国との関係史を通じて把握しようとする方向にめざましく表れている。

そこで本稿では、最近変化してきている高麗前期の韓日関係に関する研究成果を整理してみたい。具体的な研究成果の内容とその傾向の変化についても検討しようと思う。これにより韓国における高麗前期の韓日関係史研究の成果の特徴と展望まで見られると思う。

* 京畿大学校人文大学史学科副教授

¹ 日本では、「元寇」、「蒙古襲来」、「文永・弘安」の役などと呼ばれている。最近韓国でも、この用語に代わり「蒙古と高麗と日本侵攻」と呼ぶべきであるという主張が提起されている。

2. 高麗前期韓日關係史の研究成果概観

まず、高麗時代に関する一般的な研究とその過程から、高麗前期韓日關係史の研究がどの程度の割合で関心を持たれているかについてみてみたい。基本的に様々な学会の活動やセミナーなどの回数も調査しなければならないが、本稿では『歴史学報』に収録されている回顧と展望を対象として、その概略を検討してみたい。

『歴史学報』の回顧と展望は『歴史学報』第159号の1996年と1997年の研究成果を検討することから始まった。それ以前の高麗前期の対日關係史の研究は、すでに一定の成果が出され、その結果が『韓国史』ないしはその他の書籍で通説化されているとみなす²。そこで、本稿では『歴史学報』に回顧と展望が収録されはじめた時期を起点として、2007年に整理された内容までを検討資料として活用した。従って最近10年間の韓国史学界における高麗前期韓日關係史に関する研究成果の検討といえる³。

まず、1996年と1997年の高麗史の研究成果の検討を担当した洪承基⁴は、10冊の著書と編著8巻、そして179篇の論文を対象として主題別に研究成果を整理した。目次からわかるように、所有と耕作、門閥と貴族、起源と変化、原則と実際、権力と支配、地方と中央、民族と民族意識に区分して整理している。彼はこの中で、民族と民族意識の項目で高麗時代の外交史研究における特記すべき点として、高麗と日本との関係について関心が高まっている点を指摘している。その例として、釜山大韓民族文化研究所の『韓國民族文化』9輯⁵に6篇の日本関係論文が収録されたことを紹介している。その内容は全基雄の「羅末麗初の対日關係史研究」(「羅末麗初の 對日關係史研究」)、蔡尚植の「麗蒙の日本征伐と関連した外交文書の推移」(「麗蒙의 日本征伐과 關聯된 外交文書の 推移」)、金琪燮の「14世紀倭寇の動向と高麗の対応」(「14世紀 倭寇의 動向과 高麗의 對應」)、鄭容淑の「高麗と日本の王室婚姻についての検討—10～12世紀を中心に—」(「高麗와 日本의 王室 婚姻에 對한 檢討—10～12世紀를 中心으로—」)、魏恩淑の「高麗時期韓国と日本の村落構造比較研究」(「高麗時期 韓國과 日本의 村落構造 比較 研究」)などである。これらの研究について洪承基は、研究のほとんどが新しく、關係史であろうと比較史であろうと、高麗と日本の事情を等しく考慮して研究を進めたという点を挙げて、一定の学問的寄与を果たしたと指摘している。

² 『韓国史』においてその大綱を設定したとみることができる。その内容を簡略に整理すれば、大きく貿易関係、漂流民送還関係、使臣交換関係に区分できる。

³ 2008年に韓日關係の研究書として『戦争と記憶のなかの韓日關係』(韓日關係史学会・東北亜歴史財団編、景仁文化社) (『전쟁과 기억속의 한일관계』한일관계사학회/동북아역사재단 편, 경인문화사, 2008년)があるが、高麗前期の麗日關係に関する主題はない。

そして同年10月に「蒙古の高麗・日本侵攻と韓日關係」という主題の国際学術会議(韓日文化交流基金・東北亜歴史財団主催)において、倭寇勃興以前の時期と関連する発表があった。この日の主題は「蒙古来襲と異文化接触(基調講演、村井章介)」、「13世紀以前の麗日關係(李在範)」、「13世紀前半における麗蒙交渉の一断面(森平雅彦)」、「三別抄と麗日關係(尹龍赫)」、「蒙古の日本侵攻と日本の対応(南基鶴)」、「日本侵攻以後の麗日關係(佐伯弘次)である。

なお2009年3月に、景仁文化社から『モンゴルの高麗・日本侵攻と韓日關係』(韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編) (『몽골의 고려·일본 침공과 한일관계』韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編) が刊行された。

⁴ 「回顧と展望」『歴史学報』第159輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第159輯)。

⁵ 釜山大学校民族文化研究所、1997年(부산대학교 민족문화연구소, 1997년)。

そして、彼は一方的に韓国民族の肩を持つ研究から脱しようとする傾向を指摘しつつ、張得振の「高麗末倭寇侵略期の民の動向」⁶(「高麗末 倭寇侵略期 民의 動向」)について、この研究が隠されていた民の存在を知らせてくれたとしたが、あまりにも西欧的視点から民族主義を理解していると述べた。以上のように、1996年と1997年にかけて計179篇の論文のうち、高麗前期の対日関係史研究は2篇である。

続いて、1998年の回顧と展望を整理した金光哲⁷は、高麗時代に関する研究著書9冊と論文120篇を確認した。彼は「はじめに」で、129篇の研究結果を大きく政治・経済・社会・思想(文化)に区分して、政治の項目で対外・民族意識の項を置き、9篇の研究成果があるとした。しかし、この9篇の研究成果は高麗前期の高麗と契丹・女真の相互関係が1篇、麗蒙戦争3篇、元干渉期の国家の性格1篇、元明交替期の高麗の対外路線1篇、渤海関連の民族意識に関連する論文2篇であり、日本関係の外交史はない。

1999年の高麗史の研究成果を整理した朴鐘進⁸は、著書11冊、博士学位論文6篇、学術誌論文110数篇⁹を対象としている。この論文の対外関係と軍事制度の項で、朴鐘進は対外関係の研究について8篇の論著を提示している。この中で、高麗と日本との関係については、李領の「日本人が見た倭寇の正体—『庚寅以後の倭寇』と日本国内情勢を中心に」¹⁰(「日本人이 보는 倭寇의 正體—‘庚寅 以後 倭寇’와 日本國內情勢를 中心으로」)を紹介している。ところで、この年に李領の著書『倭寇と日麗関係史』¹¹が刊行されている。この著書は題目が倭寇と関連するが、その内容の中には倭寇以前の対日関係史論文も3篇ある。日本語で書かれた著書であり、韓国の学界の研究成果といえるかどうかは断言できないが、韓国人によって著された成果である。

2000年の高麗時代の回顧と展望を整理した李益柱¹²は、著書14篇、学位論文10篇、一般論文111篇を対象とした。李益柱によれば、14篇の著書と121篇の論文を分野別に分類すると、対外関係史は9篇である。その中で日本と関連する研究は2篇である。李炳魯の「11世紀韓日両国の対外交渉に関する一考察」¹³(「11世紀 韓日 兩國의 對外交渉에 關한 一考察」)と李領の「『庚寅年倭寇』と日本の国内情勢」¹⁴(「‘庚寅年 倭寇’와 日本의 國內情勢」)で、この中で高麗前期と関連するのは李炳魯の研究である。李炳魯の研究は、11世紀の両国間の交渉実態を分析したもので、日本の九州地域の商人と高麗の交渉事例に注目することによって、主に中央政府間の関係を中心とした韓日関係史とは別の見方をしようとした。

2001年の回顧と展望を整理した蔡雄錫¹⁵は、著書15冊、編著2冊、研究論文139篇を対象とした。と

⁶ 『国史館論叢』71、1996年(『국사관논총』71, 1996년)。

⁷ 「回顧と展望」『歴史学報』第163輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第163輯)。

⁸ 「回顧と展望」『歴史学報』第167輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第167輯)。

⁹ 110数篇としたのは、脚注に提示されている論著目録が130数篇であり、ここから著書と博士学位論文を引けば100数篇となる。本文には論文が11篇となっているが(60頁)、校正段階で誤りがあったようだ。

¹⁰ 『歴史批評』46、1999年(『역사비평』46, 1999년)。

¹¹ 東京大学出版会、1999年。

¹² 「回顧と展望」『歴史学報』第171輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第171輯)。

¹³ 『大丘史学』59、大丘史学会、2000年5月(『대구사학』59, 대구사학회, 2000년5월)。

¹⁴ 『国史館論叢』92、国史編纂委員会、2000年(『국사관논총』92, 국사편찬위원회, 2000년9월)。

¹⁵ 「回顧と展望」『歴史学報』第175輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第175輯)。

ころが、蔡雄錫の分類には対外関係に関する項目はなく、論文の末尾の「言及できなかった論著」に中国関連論文1篇が見られるだけである。この年には高麗全時期にわたって研究成果が全くなかったという意味である。

2002年に回顧と展望を整理した都賢喆¹⁶は、著書20冊、学位論文4篇、一般論文120数篇を対象とした。都賢喆はこの整理において「その他の主題」という項で対外関係史研究について言及している。ここで注目している対象は中国との関係である。これに対し、日本との関係史は李正守の「中世日本における高麗銅錢流通」¹⁷(「中世 日本에서의 高麗銅錢 流通」)と朴平植の「高麗後期の開京商業」¹⁸(「高麗後期の 開京商業」)を挙げている。この中で高麗前期に関連する研究は李正守のものであり、彼はこの研究を通して中世日本で発見される高麗銅錢の出土が、高麗と日本の密接な交流に由来するものであることを明らかにした。そして、「紹介できなかった論文」項で、海洋史と関連した研究成果を紹介している。姜鳳龍の「韓国海洋史の転換; 海洋の時代から海禁の時代へ」¹⁹(「한국해양사의 전환 ; 해양의 시대에서 해금의 시대로」)と高橋公明の「海域世界の中の済州島と高麗」²⁰(「해역세계 가운데 제주도와 고려」)である。

2003年の回顧と展望を整理した韓基汶²¹は、著書8冊、編著4冊、学位論文2篇、論文109篇を対象にした。この時期の研究成果としては、張東翼の「日本の日記資料に収録された高麗王朝関係記事の研究」²²(「日本の 日記資料에 収録된 高麗王朝 關係記事의 研究」)と李在範の「麗元連合軍の日本征伐と『東方見聞録』」²³(「麗元聯合軍의 日本征伐과 《東方見聞錄》」)がある。張東翼は日本の日記資料に収録された高麗王朝関係記事を検討し、23種類の日記に245件の資料があることを確認し、これによって韓国側年代記に全く反映されていない韓日両国間の接触事実を明らかにした。そして李在範は、『東方見聞録』に記録された麗元連合軍の日本征伐についての内容が2次遠征のみを記録し、事実の正確性も低いことを明らかにし、そのためにヨーロッパでは日本より高麗への好奇心が萎縮する結果を生むことになったとした。この二つの研究は、既存の資料に関する内容を補充し、認識を変えることになった。

2004年の回顧と展望を整理した具山祐²⁴は、国史編纂委員会から刊行される『韓国史研究彙報』に国語国文学・哲学方面の論文が多数紹介され、自身が対象とした研究成果を統計的に明らかにするのでは、正確性を期待できないと指摘した。とはいえ、政治と思想分野の論文が多く発表された点、共同・企画研究が少なくなかった点を肯定的な成果とみなした。彼によれば、対外関係史において張東翼によって日本関係資料が出たことを大きな業績とした。張東翼はすでに宋・元代の記録に載せられ

¹⁶ 「回顧と展望」『歴史学報』第179輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第179輯)。

¹⁷ 『韓国中世史研究』12、韓国中世史学会、2004年4月(『한국중세사 연구』12, 한국중세사학회, 2002년4월)。

¹⁸ 『国史館論叢』98、2002年(『국사관논총』98, 2002년)。

¹⁹ 『島嶼文化』20、2002年8月(『도서문화』20, 2002년 8월)。

²⁰ 『島嶼文化』20、2002年8月(『도서문화』20, 2002년 8월)。

²¹ 「回顧と展望」『歴史学報』第183輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第183輯)。

²² 『退溪学と韓国文化』3、慶北大退溪研究所、2003年8月(『퇴계학과 한국문화』3, 경북대 퇴계연구소 2003년8월)。

²³ 『軍史』50、国防部軍史編纂研究所、2003年12月(『군사』50, 국방부 군사편찬연구소, 2003년12월)。

²⁴ 「回顧と展望」『歴史学報』第187輯(「回顧와 展望」, 『歴史學報』第187輯)。

た高麗関連資料を集成した学界の偉大なる功労者であり、その続きとして今度は日本関連資料を整理し、大きな足跡を残した。具山祐は、張東翼の『日本古中世高麗資料研究』²⁵(『日本古中世 高麗資料 研究』)に関して「対外関係研究では、よく中国や北方民族が立てた王朝との外交関係のみを重視し、これらと結んだ外交関係に関する記録ばかりを強調して利用する学界の研究風土が、固定観念に過ぎないものであり、このような視角が一刻も早く修正されなければならないことを、この本は実証的に雄弁」したと評価している。そしてこのような資料集成によって「最近韓中日を中心とした東北アジアの動向や、経済成長によって韓国の国家としての位置づけが強まる傾向と並行して、韓国史で最近とみに人気の主題として注目される外交関係史や文明交流史の観点から、高麗時代の韓国と日本の関係についての正しい接近が可能になるという意味がある」と述べた²⁶。これと共に具山祐は、水軍関連資料集である『高麗時代水軍関連史料集』²⁷(『高麗時代水軍關聯史料集』)についても、「同書は見方を変えれば今まで空白地帯として残されていた海洋交流史、沿岸地域史研究にも活用」できると指摘している。2004年に行われた企画共同研究としては、高麗時代の馬山の行政区域である合浦県を通して地域の実態の一面を探り、以後日本の征伐基地として活用されるまでの歴史像を強調した研究が進行している²⁸。また、三別抄の対蒙抗争が韓国内外の情勢に与えた影響に関する研究²⁹が出るなどとした。三別抄についての認識は、政治史のみならず韓日関係史においても重要なものとして扱わなければならない内容である。高麗時代釜山の対外交流と関連した研究³⁰も進んでいる。

2005年度の研究成果を整理した李鎮漢³¹は、著書と論文を合わせて110数篇を対象とした。その中で韓日関係に関して2篇の論文を挙げている。李鎮漢の「武臣政権成立の国際的契機—比較史的な観点を通じた考察—」³²(「武臣政權 成立의 國際的 契機—比較史的인 觀點을 통한 考察—」)と裴象鉉の「三別抄の南海抗争」³³(「三別抄의 南海抗爭」)である。李鎮漢は12世紀末の高麗と日本で武人政権が成立した原因を比較史的に検討した。高麗と日本の両国は対宋貿易が活発になる中、貴族の奢侈品輸入が増加し、これは官吏の腐敗と民心の離反をもたらし、対宋貿易で租税が増加し、民を苦しめたことが武臣の乱の背景になったと整理している。このような研究は関係史を直接研究した内容ではないが、今後の韓日両国史の比較という点で留意すべきものである。裴象鉉は三別抄が水軍を率いて南海沿岸の漕倉を掌握し、貢賦輸送を遮断することで開京政府を経済的に圧迫し、金州では対日

²⁵ ソウル大学校出版部、2004年(서울대학교출판부, 2004년)。

²⁶ 具山祐は、張東翼が翌年一連の資料集を編纂するまでの過程、資料の共有と深化された研究のための提案を明らかにした「より進展した高麗時代史研究のための基礎固め」『歴史学報』第185輯、歴史学会、2005年(「보다 進展된 高麗時代史 研究을 위한 基礎 다지기」『역사학보』 제185집, 역사학회, 2005년)も紹介している。

²⁷ 任元彬・金州植・李敏雄・鄭鎮述、新書苑、2004年。

²⁸ 金光哲「高麗時代 合浦地域社会」、『韓国中世史研究』17、韓国中世史学会、2000年(김광철, 「고려시대 합포지역사회」, 『한국중세사연구』17, 한국중세사학회, 2000년)。

²⁹ 金潤坤「三別抄政府の対蒙抗戦と内外情勢変化」、『韓国中世史研究』17、韓国中世史学会、2000年(김윤근, 「삼별초정부의 대몽항진과 국내외 정세변화」, 『한국중세사연구』17, 한국중세사학회, 2000년)。

³⁰ 李宗峯「高麗時代釜山地域の対外交流」、『港都釜山』20、釜山広域市史編纂委員会、2004年(이종봉, 「고려시대 부산지역의 대외교류」, 『항도부산』20, 부산광역시사편찬위원회, 2004년)。

³¹ 「回顧と展望」『歴史学報』第191輯(「回顧와 展望」, 『歷史學報』第191輯)。

³² 『論文集』40、韓国放送通信大、2005年(『논문집』40, 한국방송통신대, 2005년)。

³³ 『歴史と境界』57、2005年(『역사와 경계』57, 2005년)。

交渉を模索するなどしたが、これは彼らの抗争が基層民と利害を共有しながら新しい国家を指向したものだといふ。今後三別抄の研究は日本征伐と関連づけて研究されなければならない主題である。

2006年度の回顧と展望を整理した金秉仁³⁴は、著書17冊、論文125篇を対象とした。彼は、対外関係及び交流史における対日関係論文は、尹龍赫の「麗元軍の日本侵入をめぐる諸問題—1274年1次侵入を中心に—」³⁵（「麗元軍의 日本侵入을 둘러싼 몇 問題—1274年1次侵入을 中心으로—」）を紹介している。尹龍赫は1274年の1次侵入を中心に麗元軍の日本侵入についてのいくつかの問題を議論し、韓国史上初の本格的海外派兵という点で追加的な研究が必要だという事実を強調している。その他に李在範の「高麗末・朝鮮前期の倭寇と泗川」³⁶（「高麗末 朝鮮前期의 倭寇와 泗川」）を紹介しているが、これは高麗後期の倭寇猖獗と関連するものである。したがって尹龍赫の研究結果のみが倭寇以前の対日関係研究といえる。

ここまで、1996年の研究成果から2006年までの結果を見ると、高麗前期の対日関係研究は非常に歴史が浅いことがわかる。『歴史学報』の回顧と展望が全てだとは言えないが、高麗前期の対日関係研究は、釜山大学の韓国民族文化研究所で『韓国民族文化』9輯に6篇の日本関係論文が収録されたことを除けば全くない時もあり、多くて1～2件程度である。大体、一研究者が対象を130件程度とすれば、1%にも及ばない³⁷。

高麗前期の韓日関係史が質と量の面でそれほど際立っているとはいえないのは当然の結果といえる。その理由は第1に、高麗前期対日関係に関連する基本的な文献記録が多くないためである。そして、この時期は主に北方からの侵略に悩まされた時期であり、また先進中国文化を吸収に奔走していた時期だった。したがってこの時期に対日関係が相対的におろそかになるのは仕方のない状況であったといわねばならない。

そして、日本との関係史は主に倭寇の活動と関連したものが多かった。韓国では、日本との敵対的民族感情に基づき、比較的円満な関係が形成された倭寇勃興以前の高麗の対日関係研究についてはおろそかにされる状況が作り出された。したがって相対的に対日関係史研究が倭寇の侵攻とこれを討伐する民族の精気の強調に力を注ぐ傾向がある。このような韓国の民族主義一辺倒の対外関係史研究については、一定の検討と反省が必要である。そのために、すでに著された研究成果を収集し、類型別、時期別、分野別などに区分・整理し、現況を把握することによって、今後の研究のための基礎資料として活用する必要が切実に感じられる時に来ているのである。

³⁴ 「回顧と展望」『歴史学報』第195輯（「回顧와 展望」、『歴史学報』第195輯）。

³⁵ 『島嶼文化』25、2006年（『도서문화』25、2006년）。

³⁶ 『軍史』58、2006年（『군사』58、2006년）。

³⁷ しかし不十分な点がないわけではない。日本での韓国人による研究、一方の日本史の視角からの研究も多少いい加減に取り扱っているという感がある。「回顧と展望」を担当した研究者が国史編纂委員会で刊行した『韓国史研究彙報』を底本にしたという点を考慮すれば、韓国内における研究成果を主とするほかなかったのだろう。南基鶴の「高麗と日本の相互認識」『日本歴史研究』11、2000年（남기학「고려와 일본의 상호인식」『일본역사연구』11、2000년）と「10-13世紀の東アジアと高麗・日本」『人文学研究』第9輯、翰林大学校「10-13세기의 동아시아와 고려·일본」『인문학연구』제9집, 한림대학교）などと、李炳魯「日本側史料から見た10世紀の韓日関係」『大丘史学』57、大丘史学会、1999年（이병로「일본측 사료로 본 10세기의 한일관계」, 『대구사학』57, 대구사학회, 1999년）、李領の『倭寇と日麗關係史』（東京大学出版会、1999年）は見つけたが、おそらくこれより多くの研究成果があったと考えられる。

3. 高麗前期対日関係史の研究傾向

前章で、高麗前期の研究が質と量の面で十分ではないという評価をした。それでは、高麗時代の対日関係はどのような傾向性を有しているのかを確認してみよう。すでに前章で検討した研究成果を類型別・主題別に分類してみよう。

最初に、史料類をみてみると、張東翼の『日本古中世高麗資料研究』³⁸と、『高麗時代水軍関連史料集』³⁹がある。史料集の編纂は主題別の論文研究を活性化する基礎作業で、学問の底辺拡大につながる直接的な学問活動である。最近10年以内に、このような基礎的な作業が遂行されたということは、さらなる研究を促進する事実であるといってもよいであろう。

まず、張東翼の『日本古中世高麗資料研究』を検討してみよう。同書は編者の張東翼がかつて高麗と中国との関係を研究する基礎資料として集大成した『元代麗史資料集録』⁴⁰と『宋代麗史資料集録』⁴¹に続くもので、高麗と関連する周辺国の資料を網羅した結果をもたらし、注目に値する研究成果である。編者は編集後記のなかで同書の刊行について時間と経済的条件が悪く、「資料の重要性よりは、日本典籍の史籍解題程度に整理するほかなかった」と謙遜しているが、同書の刊行は韓日関係史を研究する上での底本として活用できる資料を提供したという点で価値が大きく、学界への貢献が非常に大きいといえる。同書は大きく本編と付録に区分され、本編5章と付録3章で編成されている。本編では、日本古中世資料の中の高麗関係記事の概観に続き、日記類、古文書、編纂記録類、序跋、題記類に収録された記事を原文とともに資料紹介と内容概要を付し、資料の理解度と活用度を高めてくれている。付録は、中世資料に収録された高麗王朝以前の時期および朝鮮王朝と関連した記事と、日本に渡った各種資料で紹介された記事を収録している。ゆえに、題名は「古中世」としているが、古中世関連史実だけでなく、古中世資料にある全時期の史実を網羅した資料集成というべき研究成果である。

次に、『高麗時代水軍関連史料集』に関してである。同書の題名は水軍関連であるが、その内容は海洋と関連した全ての事項である。編著者がみずから「実質的に、内容からは直接的な水軍関連史料よりは、広範囲の海洋活動史と関連した史料の内容が多い」と明らかにしているとおりである。一つだけ残念な点は、『高麗史』と『高麗史節要』の水軍関連の内容だけを搜索して整理した。このような限定された史料だけで、この史料集を発刊したのは、現実的な能力の限界によるもの」と編著者が指摘しているとおりである。しかし、このような韓国内の史料だけでも忠実に整理したという事実は、貴重な研究成果だといえよう。

そして、著書類としては、『韓国民族文化』⁴²に6篇の日本関係論文が収録されていることが唯一であった。しかし、この著書は定期刊行物の特集形式で日本と関連した内容が紹介されたものであり、厳密に区分すれば、単行本著書の性格と考えることはできない。ここに収録された6篇の論文の中で、高麗前期の対日関係研究は3件である。この3件については論文類の項目で紹介する。

³⁸ ソウル大学校出版部、2004年(서울대학교 출판부, 2004년)。

³⁹ 任元彬・金州植・李敏雄・鄭鎮述、新書苑、2004年(임원빈・김주식・이민웅・정진술, 신서원, 2004년)。

⁴⁰ ソウル大学校出版部、1997年(서울대학교 출판부, 1997년)。

⁴¹ ソウル大学校出版部、2000年(서울대학교 출판부, 2000년)。

⁴² 釜山大学校民族文化研究所、1997年(부산대학교 민족문화연구소, 1997년)。

この時期に刊行された著書類としては、李領の『倭寇と日麗関係史』⁴³を挙げることができる。ところで、この本は日本で発刊されたためかもしれないが、当該年の回顧と展望の対象著書として扱われていない。ここに一つの問題が提起されるのであるが、韓国内の研究成果を展望する時の、外国で刊行された研究成果の取り扱いの問題である。外国での研究活動を韓国内で把握するには、情報もそれほどなく、難しいとはいえ、なるべく対象に含むほうが望ましいと思われる。同書は、高麗前期ではなく倭寇を主に扱っているが、高麗前期と関連する3篇の論文も収録されている。第1章「院政期の日本・高麗交流に関する一考察」、第2章「中世前期の日本と高麗」、第3章「元寇と日本・高麗関係」である。第1章は、高麗初期からの対日関係史を叙述している。そして第2章では、高麗前期の最も公式的な関係であるといえる、国家と国家の間の進奉船関係についての叙述がある。さらに第3章では、麗蒙連合軍と日本・高麗関係を叙述しており、趙彝、李蔵用、三別抄のような麗蒙連合軍以前の外交関係を叙述している。

そして論文類としては、1996年から2006年までの研究成果が9篇あるのみである。論文が11年間に9篇ということは、1篇も発表されていないと年もあるという意味である。

全基雄の「羅末麗初の対日関係史研究」⁴⁴(「羅末麗初の對日關係史 研究」)は、8世紀から高麗文宗代の11世紀までの高麗と日本との関係を整理している。同論文で全基雄は、「両国の関係が、時期ごとにどのような様相になっているかを検討して、両国の国内事情と政府間の公式交流がどのような関連の中で変化していったのかについて留意しようとしている。また、韓半島の場合、羅末麗初は新羅の支配体制が崩壊する中で、後三国を統一した高麗が成立していく時点にあることから、この過程での日本との交渉目的、二つ目には、今まで注目されてこなかった民間交流関係に留意して、政府間の公式的な交渉より、民間海上勢力による交渉が主導的であったことを明らかにしている。そして、9世紀後半に至ると、受取体制の崩壊で、民の武装蜂起が起り、地方豪族が独自の勢力として台頭しつつ、対外活動も豪族勢力の経済的交流が主となる」と主張している。そして、弓裔の日本との関係について言及がなく、単に王建を通じて西南海岸一帯を掌握したという叙述にとどまっている。弓裔代は西南海岸を弓裔が掌握することができたが、王建によって放逐された後、高麗は全国を経営しなければならなかったことから、西南海岸の海上権の優位を後百済に渡すしかなかったという。もちろん、王建も羅州の経営に力を傾け、920年、康州將軍閔雄の帰順、927年、転伊山・老浦平・西山・突山などの4郷を陥落させ、勢力を拡大していったが、当時の甄萱は絶影島(釜山松島)の名馬を送ることができるほど、南海岸で勢力を固めていたのである。しかし、甄萱は後百済王の称号を受けるなど、南中国との通交は活発だったが、日本との通交はそれほど活発ではなかったと整理している。

金潤坤は「三別抄政府の対蒙抗戦と国内外情勢変化」(「三別抄政府의 對蒙抗戰과 國內外情勢變化」)で、三別抄は民族的自主国防の軍人勢力と、一統三韓の伝統を守護して称帝建元を主唱していた王政復旧勢力、そして地方土着勢力の連合政権として不退転の勇気でモンゴル勢力と戦って敗退したという。民族主義の視角から三別抄の抗争を扱ったが、その戦いの目的が日本征伐と制海権を

⁴³ 東京大学出版会、1999年。

⁴⁴ 全基雄『韓国民族文化』3(전기웅, 『한국민족문화』3)。

確保しようとしていたという点⁴⁵だということに、三別抄の抗戦を東アジア的視点から見たといえるだろう。

蔡尚植の「麗蒙の日本征伐と関連した外交文書の推移」(「麗蒙의 日本征伐과 關聯된 外交文書 의 推移」)はそれまで注意深く検討されてこなかった麗蒙連合軍を、東アジアにおける重要な事件と認め、蒙古と高麗が日本に送った外交文書に関心を示した。そして麗蒙の東征以前に5回にわたって日本に使者を派遣した事実とこれに対する日本の鎌倉幕府の行動が強硬一辺倒であったことを明らかにした。その背景としては南宋で対蒙抗争に積極的な傾向を持った臨済宗僧侶の活動があったためと推定した。

「日本側史料からみた10世紀の韓日関係」⁴⁶(「日本側 史料로 본 10世紀의 韓日關係」)と「11世紀韓日両国の対外交渉に関する一考察」⁴⁷(「11世紀 韓日兩國의 對外交渉에 關한 一考察」)などの李炳魯の二つの研究は、時期別に研究してきた結果である。まず前者については、筆者の日本人の伝統的な韓国観に対する批判で始まるのが特徴である。李炳魯は10世紀に入っても日本の支配層が相変わらず古代韓国を日本の蕃国として認識していることを批判する。このような歪曲された日本の歴史観により、この時期に行われた甄萱と王建が送った外交使節を、国家で送った使臣ではなく朝貢使程度と認識するようになったのである。このような批判とともに、後百済から920年代に2回にわたって日本に使臣を送ったことは、高麗と新羅が連合関係を結ぶことになったため、これらの勢力に脅威を感じ、新しい突破口をととのえるための手段であったと指摘した。そして、王建が後三国を統一した後、2、3回にわたり外交使節を日本に派遣した理由については、王建が後三国を統一した自身の偉業を誇示しようとした行為であったと推定している。このような主張は、いままで日本側が主張していた高麗が後百済と新羅の残存勢力が日本と手を結ぶことを事前に防止するために派遣した朝貢使として認識するという通説への批判的見解ともいえる。そして、高麗と日本の関係は10世紀末になると、高麗から派遣した使臣への対応措置として交易使を派遣して、9世紀中葉以降断絶された高麗との交易に本格的に乗り出しているという見解を示している。

続いて、李炳魯は11世紀の高麗と日本との関係を考察した。同論文において李炳魯は、11世紀の高麗と日本との往来事実を38件摘出し、両国関係の性格を明らかにしている。これによれば、高麗は北方民族の台頭によって日本との交易に消極的な政策に転換し、交易自体も官主導で行われるほかなかったという。ゆえに、北方民族との対置で、ともすれば国家体制に脅威となる海上勢力の出現を望まなかったために、日本との交易をおろそかにしたと指摘した。このような影響で、11世紀中葉以後には、日本側がむしろ韓半島に渡って交易活動を展開し、高麗は九州地域の一部勢力を高麗の世界秩序に編入させて管理することで、萎縮された海外交易を補ったとする。そして両国間の問題となるのは、双方が相手方を朝貢国として認識していたために、正常的な外交関係を持つことはなく、牒状の用語をめぐって外交的摩擦を起こしていたとした。

⁴⁵ 金潤坤、99-100頁(김윤곤, 99-100쪽)。

⁴⁶ 『大丘史学』57、大丘史学会、1999年(『대구사학』57, 대구사학회, 1999년)。

⁴⁷ 『大丘史学』59、大丘史学会、2000年(『대구사학』59, 대구사학회, 2000년)。

張東翼の「日本日記資料に収録された高麗王朝関係記事の研究」⁴⁸(「日本 日記資料에 収録된 高麗王朝 關係記事의 研究」)は、筆者の張東翼自身が早くから韓国史研究の限界の一つである資料の不足を補うために努力してきたことを証明するように、日本にある高麗関係の資料を集めてその現況と状態を整理したものである。この研究によれば日本の各種資料に収録されている高麗王朝関係記事は約450件を探したという。この資料を類型別に分類すると、日記類が23種245件、編纂記録類が26種162件、古文書資料31件、序跋・題記類14件という。そしてその内容は、高麗王朝側の外交樹立のための使臣および国書の派遣、両国人の往来、漂流民の送還、韓半島の文物の日本伝来などに関する資料が多く割合を占めているという。しかしその資料のなかで、日記類は内容自体が極めて簡単で、これを通じて高麗と日本の外交関係の推移までを検討することはできないという資料の限界も同時に指摘している。しかし、韓国側の年代記に全く反映されていない韓日両国間でなされていた接触の事実および、高麗と日本両国間で行われていた人的交流および文物交流の一端を確認することができ、史料としての価値を認めている。そして日記類をまた、「公家日記類」と「寺社日記類」に分けて、その種類と件数を分類している。そして、この23種類の日記に出てくる高麗関係記事245件の内容を時期別に整理・収録している。ここからさらに、張東翼は245件の記事を日付別に整理して、合計83件に分けることで重複が多いことを指摘しつつ、高麗側の資料を補う注目すべき記事だけを簡略に整理して、今後のこの分野の研究者たちに大きな助けを与えている。実にこのような資料の発掘と整理は、学問研究の基礎となる事業として、その重要度は言うまでもないことである。張東翼は結論的に高麗前期に該当する13世紀以前に作られた日記に、韓国側の年代記に全く反映されていない韓日二国間の接触および漂流民の送還についての史実が多数記録されており、その他に麗蒙連合軍の日本征伐についての記事が多く収録されている点を指摘し、日本の状況もある程度把握できる重要な資料とした。

李在範の「麗元連合軍の日本征伐と『東方見聞録』」⁴⁹(「麗元聯合軍의 日本征伐과 《東方見聞録》」)はマルコ・ポーロの『東方見聞録』に収録されている麗元連合軍の日本征伐に関する記事の実証性に疑問を抱き、真偽を明らかにしようとした。李在範は『東方見聞録』の口述者であるマルコ・ポーロが、クビライの側近であった人物と言っているにも関わらず、当時の元の朝廷における最大の事件といえる麗蒙連合軍の日本征伐についての情報があまりにもおろそかで不正確なことに疑問を提起している。特にマルコ・ポーロが中国に入った年が1274年という点に注目し、その年が第1次麗蒙連合軍の日本征伐があった年だが、『東方見聞録』にはそれに関する内容はなく、第2次日本征伐に関する内容しかないということにも再び疑問を提起した。そして、マルコ・ポーロが中国に行ったとしても、その年代がはっきりしないというだけでなく、クビライに寵愛される高い地位になかっただろうと推定している。また、マルコ・ポーロが日本の代称とみなされるジパングを「黄金の国」としてヨーロッパに紹介し、相対的に高麗についての好奇心をヨーロッパ社会で萎縮させたという結論を下している。多少我田引水的な論証が見えるが、これまで注目されてこなかった麗蒙連合軍についての関心を提起したという点で意味を見出すことができる。そして、麗蒙連合軍の日本征伐がアジアを超えて世界史的な事件である

⁴⁸ 『退溪学と韓国文化』33、慶北大退溪研究所、2003年8月(『퇴계학과 한국문화』33, 경북대 퇴계연구소 2003년8월)。

⁴⁹ 『軍史』50、国防部軍史編纂研究所、2003年12月(『군사』 50, 국방부 군사편찬연구소, 2003년12월)。

にも関わらず、韓国学界での関心が不足したというのが物足りなさを生み出したといえる。

李正守の「中世日本における高麗銅銭の流通」⁵⁰（「中世 日本에서의 高麗銅銭 流通」）は、日本で発見されている高麗銅銭に関するものである。李正守は日本で大量の銅銭を埋蔵する理由は、様々な災厄に対処するために財貨を備蓄する方法の一つとしての備蓄銭である場合があり、また一方では、土地を開発するときに土地の仏神に奉獻する呪術的な銭貨として、神仏から土地の用益権を買い入れたり、許可を得るといった観念を前提にした埋納銭の場合があるとした。そして高麗の海東通宝が日本の備蓄銭の中から多数発見されており、この銅銭を基礎として当時の高麗と日本との関係を明らかにしている。同研究において注目すべきことは、第一に、高麗前期の楮貨流通政策と対外交流を通して、高麗銅銭の日本流出過程を推定し、第二に、日本中世の銭貨流通状況と日本国内の備蓄銭の出土状況を概観し、最後に、備蓄銭中の高麗銅銭の出土状況を通して、その政治・経済的意味を検討している。このような過程において、高麗の銅銭がどのように日本に流出したのかを明らかにすることは、当時の高麗と日本の関係を、物流の流過程を通じて確認できる契機として非常に有用な研究と思われる。そして李正守は、高麗銅銭が流出して中世日本で流通していた原因を、高麗の国内外の事情と関連づけている。高麗銅銭の日本流出は、高麗政府の貨幣政策と関連があるとする。高麗建国以降、成宗代までの高麗王朝の土台が確立される過程で、生産力の増大とともに国内外の商業が発達した。これとともに金属貨幣流通の必要性が積極的に提起され、成宗15年(996)の鉄銭鑄造以後、12世紀初盤の肅宗代まで、銅銭の鑄造と流通が政府次元で積極的に試みられた。しかし、高麗国内の銅銭流通政策は、銅銭の信用力不足などの様々な要因によって円滑に行われず、民間の流通で銅銭が拒否される現象があらわれたという。その結果、銅銭は官庁や民間の倉庫にたまるようになり、他の商品と同じく一つの商品として商人などの手によって日本に流出したと推定された。そして、高麗銅銭は、北海道から九州地域までほとんど日本全域で発掘されているが、その種類は東国通宝・東国重宝・海東通宝・海東重宝・三韓通宝・三韓重宝の6種類で、穆宗と肅宗年間に鑄造された貨幣がほとんど網羅されているのである。その数量の順序は、海東通宝・東国通宝・東国重宝・海東重宝・三韓通宝・三韓重宝の順だという。

裴象鉉の「三別抄の南海抗争」⁵¹（「三別抄의 南海抗争」）は、三別抄の抗争について扱っているが、郷土史的立場から接近しているのが特異である。これと関連して東アジア的関心も高めている。しかし韓国の学界では、三別抄は対蒙抗争と関連づけたり、階級闘争的側面からの観点がいまだ主流である。同研究も端的に言えば、民族抗争的な側面からの研究といえるが、従来の研究と区別される点は、三別抄の南海での抗戦を集中的に扱い、その南海抗戦の性格を新たに印象づけたという点である。特に、従来の官撰史書ばかりに依存するのではなく、現地の説話のような地域の口伝資料を利用して、生き生きと当時の状況を再構成したという点で、より具体的な三別抄の実像に近づいたというところに大きな意義がある。そして、三別抄の指導層のなかで、一人で文翰を担当したほどの知識人の系列に分類される劉存奕の存在を深く掘り下げている。そして、南海を拠点とする勢力が日本との外交活動に

⁵⁰ 『韓国中世史研究』12、韓国中世史学会、2002年12月（『한국중세사 연구』12, 한국중세사학회, 2002년 4월）。

⁵¹ 『歴史と境界』57、2005年（『역사와 경계』57, 2005년）。

深く関与することができたとし、いわゆる「高麗牒状不審條條」を送るなどの外交活動が、南海中心の劉存奕勢力によって推進された可能性が大きいと主張している。南海勢力は水軍を前面に押し開京政府と蒙古軍を相手に熾烈な抗争を繰り広げる一方で、内陸では在地勢力ないしは知識人たちの同調を引き出しながら支持層を広げていき、対日連帯を通じてより強力な抗蒙戦線を構築しようと試みたという結論を下している。三別抄の性格はあくまでも高麗という範囲内でなされたことであり、抗蒙という次元で日本との提携を図ったという意味である。三別抄を独立の単位として解釈するまでには至っていない。しかし、三別抄内での権力構造と彼らの機能をより具体化したという点で、従来の研究成果から一歩前進したといえるであろう。

尹龍焄の「麗元軍の日本侵入をめぐる諸問題—1274年1次侵入を中心に—」⁵²(「麗元軍의 日本侵入을 둘러싼 몇 問題—1274年1次侵入을 中心으로—」)は、麗元軍の日本侵入において高麗が主要当事国の一つであったにも関わらず、高麗の役割についての研究がほとんど試みられてこなかったことを指摘している。そしてこの事件が韓国史最初の海外派兵であるという点で日本側の研究を韓国の立場から検討する必要があるという点も要求している。当然の指摘であろう。同時に同研究では、1次遠征軍の規模には諸説あるが、3万2千人余りだったであろうという点、遠征軍の軍船も一般的に知られている900隻に届かない数であり、特に「大船300隻」は、実際にはその半分にも満たなかったことを実証的に検討している。そして、連合軍の敗戦の原因も、暴風雨が影響を与えたのではあるが、決定的な要因ではなかったと主張した。すでに連合軍は軍需補給の問題から蹉跌を来していたために、撤軍を決定したのであったという結論を導き出し、日本での支配的な主張である暴風雨説について異見を提示している。

李宗峯の「高麗時代釜山地域の対外交流」(「高麗時代 釜山地域の 對外交流」)⁵³は、高麗時代の釜山地域における対外交流が対外関係の展開につれてどのようにあらわれたのかを中心に検討した研究である。そのため釜山を中心に中国と日本との関係を扱っている。その中で対日関係についても整理した部分がある。同研究では、高麗の対日関係を4つの時期に分け、第4期に該当する倭寇以降の時期を除いてそれ以前の3つの時期を検討した。筆者は第1期の10世紀は、高麗から使臣を集中的に派遣して外交関係を持とうとしたが、日本では高麗の侵略に対する恐れを持っていたために、対日関係が形成されなかったとした。そしてこのような現象は、11世紀の女真の刀伊族による日本侵略を契機として、両国の関係が新しく展開したことにより、日本の商人は八関会的秩序下で商業活動をしていたという。そして、このような関係は12世紀に持続されて、商人による商業活動が展開されたとした。さらに、高麗と日本との関係における公貿易の形態は、日本が高麗に対して進奉する方式であったと理解し、私貿易も開京に行く日本商人が金州を経て行ったために、釜山との交易が展開されたことを明らかにした。地域的な側面から対日関係を検討した成果とみることができるであろう。

以上のように、高麗前期に関する研究はその数は多くはないが、かなり多様な性格をもっている。史料集とともに論文の内容でも10世紀、11世紀、三別抄、麗元連合軍など、時期別にちょうどよく配置したような内容である。このような傾向は、たとえ量は多くなくとも、高麗前期の韓日関係史についての関

⁵² 『島嶼文化』25、2006年(『도서문화』25、2006년)。

⁵³ 『港都釜山』第20号、釜山広域市史編纂委員会(『항도부산』제20호, 부산광역시사편찬위원회)

心の幅が広がり、多様化したことを意味しているといえる。

4. 特徴および展望

何よりもこの時期の研究の特徴は、これまで研究者が渴望してきた日本の資料を集大成した資料集が刊行されたことは大きな成果の一つとして挙げなければならないのである。すでに日本の学界では通用してきた資料だが、張東翼などの研究者によって韓国で集成され、紹介されたという点が非常に注目するに値する。彼はこのような仕事を行った次のように動機を明らかにしており、大変参考となる⁵⁴。

彼が資料集を発刊することになった理由は次のとおりである。第一には、筆者が歴史学を勉強しはじめた70年代初期には、資料の入手が困難であったことを挙げられる。専攻分野を異にする恩師たちの本棚にはさまざまにあって、日本人研究者の論文を読むことが多かった。その論文に引用されていた資料が、中国の本であれ、日本の本であれ、知ることができない状態であり、これを求めることはさらに困難であった。そこで、他の高麗史専攻者たちと同じく、『高麗史』『高麗史節要』のような年代記に主に依存して論文を書くとき、脚注に引用された本がいつも「同上書」、さもなくば「前掲書」がほとんどなので、常に物足りない気持になることが多かった。この点はただ単に筆者ひとりが感じていたのではなく、同学たちも共感していた物足りなさであった。第二には、1960年代以降のおよそ20数年間、文献史学を研究していた多くの学者が韓国側の文献である年代記・文集・金石文などの資料だけに限定して研究を遂行してきたという限界を脱しようとしたことである。既成の学者は、一定の成果を収めたが、常に資料不足を主張する一方、一部の若手学者たちによる、新しい理論的な方法の駆使に対しては、資料の裏付けが不足しているという理由で強い拒否感を示してもいた。これは、韓国戦争前後に活躍した学者たちが、外国の資料を部分的ながらも利用してもいた伝統を継承できないまま、現実に住していた結果である。筆者もまた、実証史学の限界に甘んじている一学者として、みずからを批判すると同時に、学問の後続世代により多くの資料に接する小さな与件でも提供したいという欲を持ったためである⁵⁵。

よく「玉が三斗あってもつないでこそ宝」というが、これがまさに史料を集大成するのに相応しい表現であるということは先学が指摘したとおりである。これまで日本における麗日関係史研究は韓国の学界より水準が高かったことが知られている。質の面はそうであるとしても、量的な面では圧倒的に多い。しかしこのような現象は日本には高麗前期関連の資料が残っているが、韓国ではほとんど多くなかったためである。そしてこれまで、先に引用したとおり、韓国の学界の雰囲気、日本の史料に簡単に接近することができないものだった。しかし現在に至り、日本で利用されている史料を集大成したことによって、韓日関係史において日本資料に直接当たることが可能になった。したがってこの分野において刮目した成果を期待できるといってよいだろう。

⁵⁴ 張東翼「より進展した高麗時代史研究のための基礎固め」『歴史学報』第185輯、307～308ページ(장동익, 「보다 진전된 고려시대사 연구를 위한 기초 다지기」『역사학보』제185집, 307～308쪽)。

⁵⁵ 張東翼前掲論文。

一方この時期の研究の特徴といえば、やはり日本史料を利用した研究が増えたことである。張東翼の資料集成が出る以前にも、日本史料を利用した研究があらわれ始めた。全基雄、李炳魯などの研究がそれである。また李領も日本史料を引用する頻度が高くなった。このような現状は望ましいこととして受け入れられる。そして尹龍赫の場合のように、麗元連合軍の日本征伐について、正面から史料検討を通じて自身の固有の主張を明らかにした研究もある。そのために最近10数年間の韓国内での高麗前期対日関係史研究の特徴を言えば、史料集の編纂以来多様な研究がなされたといえるだろう。それにも関わらず、依然としてその量的な面での不振を大きな問題として指摘せざるをえない。このような問題を克服するためには多くの研究者が必要だということは明らかだが、その養成の対策を論じることは容易でない。

他方、同一の主題についての韓日両国間の見解の違いが、まだ大きな障壁として残っているという事実を挙げなければならない。この問題は本稿の主題である研究成果の整理とは無関係なように見えるが、研究傾向における違いは、関係史の立場から見ると、共同研究などを行う上での大きな障害物になるため、一瞥しておこうと思う。この両国間の民族主義的性向の歴史観による大きな壁が尖鋭にあらわれた分野は「麗元連合軍の日本征伐」である。この事件に関するものは、両国間の呼称⁵⁶の違いにもあらわれているが、その内容についての教育の差も大きい。韓国ではこれを海外派兵の一事例として考えようとする傾向がある⁵⁷。しかし日本はこの事件を大陸からの掠奪的で野蛮な侵略とみなし、これに対して全日本人が一致団結した態度で撃退したという教育をしている。特に日本征伐の直接的な被害地であった壱岐ではその程度がひとときわ深刻である。壱岐で2001年に、元寇720周年を迎えて刊行された『元寇一元寇激戦の地・壱岐一』⁵⁸には、麗元連合軍の残忍さを強調した表現と内容がいくつかあらわれる。まずこの本では悲慘という意味の日本語「むごい」の語源が麗蒙連合軍の侵攻から始まったとする。「むごい」は蒙古(モンゴル)を意味する「むくり」と高麗を意味する「ごくり」の最初の字を取ったものだという。それから麗元連合軍は対馬島で「衆寡不敵(80対2万5千)」の日本軍を一人残らず殺し、続々と島の中に入り、すべての民家に火をつけ、老若男女を問わずすべて殺し、地獄のような惨状になったという。また連合軍が「最後まで奮戦した対馬守護代の宗助国の首と体を切って島内を引きまわした」とも叙述している。連合軍の残酷な行為は壱岐でも行われたが、「対馬と同様に島内の男子を斬殺し、生け捕りにした女子は手のひらに穴を開けてそこに縄を通して船べりにくくりつけておいた」と表現している箇所もある。さらに連合軍は敗戦して帰国する際にも「壱岐・対馬に上陸して童男・童女200人を捕まえて捕虜」としてクビライに送ったと記録している。第2次征伐の時にも連合軍の残虐さは、「妊産婦の腹を裂いて胎児を取り出し、乳飲み子は足をつかんで引き裂き、捕縛した男女は耳や鼻を削いでその苦しむ様子を見て楽しんだという。また若い女子は強姦し、抵抗すれば手に穴を開けて縄

⁵⁶ 韓国では「麗元連合軍の日本征伐(侵攻)」などが一般的表現である。日本では「蒙古襲来」、「元寇」、「文永・弘安の役」などと呼ばれる。

⁵⁷ 尹龍赫前掲論文。

⁵⁸ 監修:白石一郎、刊行所:元寇720周年記念事業実行委員会、2001年。同書にあるような叙述は日本学界の全般的な雰囲気とは言い難いようだ。また学術書ではなく郷土史の一面からの紹介書であるため、本稿で扱う対象とは必ずしも結びつくとはいえない。ただ、このような雰囲気が一部に残っているという事実を紹介するというぐらいに扱ったことを明らかにしておく。

を通し、地面を引きずって、船べりに吊るしたりしておいた」とし、その残虐さの象徴として教育している。

5. 結論

ここまで過去10年間の高麗前期の対日関係についての研究状況を検討した。その結果、次のようないくつかの特徴的な内容を発見できた。

第一に、高麗前期の対日関係研究は他の分野に比べて顕著に研究成果が少ない。たとえ研究成果の対象になるべきものが全て網羅されていないとしても、10年の間に研究成果物が全くなかった年も少なくなかった。そして1年に6篇の論文が出た1997年を除外すれば、1年に平均1篇以上の研究を見つけることは困難である。相対的に対中関係の研究成果物の方が多い。

第二に、最近の研究成果の中で特異な点は、韓日関係研究に有益な資料集が刊行された点である。特に『日本古中世高麗資料研究』の刊行は、日本国内にある文献にみえる高麗と関連する史実を全て抜粋して収録した資料集で、今後この分野の研究に大きく寄与するものと考えられる。この研究書に収録された記録が、初めて韓国で紹介された内容というわけではないが、このように一卷に集大成されたことは、この時期の韓日関係史研究に新たな場を提供する契機になるという点だけは明らかである。

第三に、韓国における韓日関係史の研究傾向が少しずつ変化していることも特徴の一つといえる。従来ほとんど不毛であった麗・元連合軍の日本征伐に関する研究成果が次第に見受けられ注目される。また、三別抄に対する視角の変化も注意深く見なければならない。従来の官撰史書の記録による民族主義的傾向から抜け出して、郷土の口述史と東アジア的観点から見ようという試みもあった。

最後に残念な点は、韓国と日本はまだ自国史的立場という高い壁を克服していないことである。例えば麗・元連合軍の日本征伐に関する視角で尖鋭にあらわれているのであるが、韓国では最初の海外派兵という事実を認めてこれを強調しようとしているのに対し、日本では大陸からの侵寇とそれに対する雪辱と戦勝を民族主義的立場から接近している。このような状況は、今後関係史の側面から韓日関係史のために克服しなければならない大きな課題として残されている。